



写真等無断転載禁止

2025. 1 1. 6 発行 ニュースレター第 3 3 9 号

〒262-0019 千葉県花見川区朝日ヶ丘 5-24-2

TEL. 090-7941-7655 FAX: 043-483-0027 代表: 小西 由希子

E-mail: yatsudasukisuki@gmail.com, Home Page: <http://www.ceic.info/>

署名集め開始！太陽光発電のリサイクル義務化を求めて

気候ネットワーク 小畑 あかね

太陽光発電について、皆様はどのような印象をお持ちでしょうか？

太陽光発電は、CO₂削減効果が高くコストも安い
ため、気候変動対策のエースというべき技術です。温
暖化や大気汚染を引き起こす化石燃料から脱却する
ため、国際的に推進されています。

一方、環境に関心の高い方々の中でもよくあがる
疑問として「太陽光パネルって、大量廃棄されちゃう
んじゃないの？」というものがあります。実際、2030
年代半ばには初期に設置されたパネルの廃棄が始ま
るといわれており、この懸念にはきちんと応えてい
く必要があります。

大量廃棄を防ぐためには、太陽光パネルも 3R して
いくことが重要です。つまり、パネルの発電効率を向
上させたり寿命を長期化することによって廃棄量を
減らす（リデュース）、パネルを再使用する（リユ
ース）、そして使えなくなったパネルはリサイクルに回
す、という順番での対応が必要になります。

太陽光パネルは実は 100% リサイクルが可能で、全
国にリサイクル拠点が拡大しています。これからは、
このリサイクル体制をいかに成り立たせるかが課題
になります。政府も大量廃棄を避けるため、リサイ
クルを義務化する制度を検討し、2025 年の通常国会で
法制化を目指していました。

しかし現在、この制度を見直し、「努力義務」ある
いは「報告義務」とする案が浮上していると報じられ
ています（日本経済新聞 2025 年 10 月 3 日報道など）。
浅尾元環境大臣は、「義務化」方針を断念する理由と
して、現時点ではパネルを埋め立て処分した場合と
のコストの差額が大きいこと、そんな中で元の案で
は自動車や家電などのリサイクル法とは異なり製造
業者などに費用負担させることとなっていたため、

合理的な説明が難しいということが挙げました。し
かし、「努力義務」等では抜けがあり効果は不透明で
す。



図：署名と拡散、大歓迎です！

パネルを効率的・経済的にリサイクルするには、や
はり「義務化」が望ましいのではないかと。こう考え、
Climate Action Network Japan（気候行動ネットワ
ーク）は、太陽光パネルのリサイクル義務化とリサイ
クル体制の整備を求める署名を立ち上げました。作
ったものをきちんと社会の中で循環させる「サーキ
ュラーエコノミー」こそが、これから求められるあり
方のはずです。太陽光発電を持続可能に発展させる
ためにも、政府には対応を求めていると思います。

署名は Change.org という署名集め用
のサイトで募集中です。地球温暖化を抑
制し、太陽光発電を適切に活用する未来
に向けて、ぜひご署名をお願いいたしま
す。

<https://www.change.org/solarpanel-recycle>

QR コードを読み込むと署名サイト「Change.org」にジャンプします



生物多様青年, 秋の活動報告

ありがたいことに、9 月～10 月にかけて様々な方
からイベントに誘っていただき、多くの貴重な経験

千葉県若葉区 鈴木 郁也

を得ることができました。簡単にではありますが、参
加したイベントの一部をご報告したいと思います。

環境アセスメント学会第24回大会2日目

エクスカージョン in 海上の森

先月のニュースレターの続きになりますが、環境アセスメント学会第24回大会の2日目(2025年9月6日)の午後は、エクスカージョンにて海上の森と愛・地球博記念公園を訪れました。

名古屋大学から、学会がチャーターしたバスで出発し、あいち海上の森センターに到着しました。そのビジターセンターで、職員さん



あいち海上の森センターで説明を受ける

さんから海上の森の環境と歴史、現在行っている保全活動などの説明を受けました。海上の森は、かつて愛知万博の開催候補地として開発が予定されましたが、森にオオタカの生息が確認されたこと、当時は環境影響評価制度の黎明期であった情勢などもあって、候補地から外された過去があります。

その後、海上の森は保全地として環境が守られることになりました。明治期の海上の森は瀬戸物を焼く薪炭林としての利用から禿山になり、大正～昭和期は森に戻す活動がされていました。瀬戸地方の貧栄養土壌の環境に育つアカマツ・トチ、食中植物のモウセンゴケの生態に合わせた保全、降水の少ない気候での水源利用など、土壌や水源の豊かな千葉とは一味違った里山保全の一端を知ることができました。



散策路にある施設で瀬戸物の展示

森の散策路には平安期の古窯を再現した窯の歴史館があり、瀬戸物が展示されていました。

食と農の未来～見て・学んで・味わう～ in 千葉商科大学

2025年9月27日
千葉商科大学で開催された「食と農の未来」というテーマのイベントに大学生4人で参加してきました。

講演会では、ソーラーシェアリング型農業や農業従事者の高齢化問題、地産地消、食料自給率など農業的なワードが飛び交う場ではありましたが、都市部・住宅地でのセイヨウミツバチ保全が周囲の植生の保全に



千葉商科大学の学生が商品化した蜂蜜の試食をする友人一同

繋がる話は、生物系の人間にとっても聞きごたえのあるお話でした。また、普段私たちが口にするお米や梨、千葉県の農作物の話は身近な話題として、とても興味をそそられました。講演会の後は、千葉商科大学の学生さんの案内で、学内にあるソーラーシェアリングのぶどう畑(ワイン用品種)や、セイヨウミツバチの巣箱を見学させていただきました。



吊り下げ式のぶどう畑の天井に、斜めに設置されたソーラーパネル

佐倉里山大学公開講座「花菖蒲とノハナショウブ講演会」in 佐倉市

2025年10月12日、佐倉里山大学の公開講座「花菖蒲とノハナショウブ講演会」に参加してきました。

佐倉市が主催している佐倉里山大学は、里山の維持管理を担う人材を育成する目的で開設され、一年を通した座学・実習を経て、里山や生物多様性の知識と刈払い機取り扱いなど実技的なスキルを身に付けることができます。

今回の講座は、佐倉の里山に咲く貴重な野生植物であるノハナショウブと、昔から園芸品種として親しまれてきた花菖蒲について知ること、地域の植物に愛着を持って里山の保全活動に臨めるよう企画されていました。



講師の田淵俊人さん

玉川大学名誉教授の田淵俊人氏の講演では、「情熱を持って活動すること」が強調され、講演者の熱意やワクワクといった感情が会場全体を巻き込んで、フィールドに人を駆り立てるような熱いお話を聞くことができました。

野生種であるノハナショウブは湿地乾燥化やシカなどの食害によって全国的に自生地が消滅傾向にあり、園芸種の花菖蒲も先の大戦以降は系統の混乱や生育の難しさから、品種の数を減らしつつあるそうです。

ハナショウブの保全には、花粉の媒介者であるトラマルハナバチの存在や、生息環境の水辺ではヨシなどの植物に負けないように定期的な草取りが必要なことなど、良好な里山・谷津田環境を保全していく必要があると訴えられました。

また、報告では佐倉市公園緑地課による花菖蒲の保全や、里山・谷津田保全の取り組みを聞くことができました。市民が触れ合う生物多様性の重要性を理解しており、紹介された現場の工夫や多額の予算をかけた取り組みを通して、自治体の熱意を感じられました。

地域資産としての東京湾三番瀬猫実川河口沖の干潟再生

ー保全生物学と地域づくりの視点からー その3

東邦大学名誉教授 風呂田 利夫

地域づくり拠点環境としての干潟の活用

干潟は遠浅で市民が海の環境と生物を最も安全でかつ効率良く観察できる場所である。特に幼児が海や干潟生物と接触でき、東京湾の魅力を安全に感じられる空間でもある。このような干潟の地的利点を生かして、小櫃川河口干潟近隣の小学校（木更津市立金田小学校）は干潟を総合的学習の場として利用している。2004年には木更津総合高校でのSPP（Science Partnership Program）授業もこの干潟の生物調査として行われ、その成果は2004年度文部科学省主催「サイエンスパートナーシッププログラム事業に係わる理科大好きシンポジウム2004」においても発表された。また三番瀬の干潟や新浜湖、葛西海浜公園においても生物観察に関する様々なプログラムが用意され、貴重な体験学習の場となっている。このように干潟は自然科学の研究と教育の進展の場となることで自然環境として活用することができ、三番瀬猫実川沖における干潟環境の再生は、単に自然としての環境の保全や再生を目標とするだけではなく、地域社会と自然環境の関係づくりの視点からも捉える必要がある。

三番瀬干潟再生の視点

三番瀬は干潟を含む約1200ヘクタールの浅瀬海域が残っているとはいえ、海岸部の人為的改変が著しなかで、都市近傍の自然環境として人間社会との関係が特に強く求められる海域である。干潟生態系の回復では、干潟環境の自然的成立機構に支えられた干潟生物の生息場とそれに対応した生物群集の再生が不可欠である。干潟は河川からの土砂の大量供給に支えられた地形であり、幼生の供給源が確保されている限り、攪乱の後に出現した環境に素早く侵入して個体群を回復させる能力が強い。例えば人工的に造成された新浜湖では、干潟出現の1年後には干潟の生物群集はほぼ復活した。このような生物各種が新たな生息場を求めつつその環境での素早い生物群集の回復を支えているのが、先に述べた干潟間の幼生供給ネットワークである。実際に東京湾の代

表的干潟生物であるアサリにおいて、局所的な親の生息地から放出されたプランクトン幼生は、東京湾全体に分散し、親の生息地から離れた遠隔地に移動していることが明らかになっている。

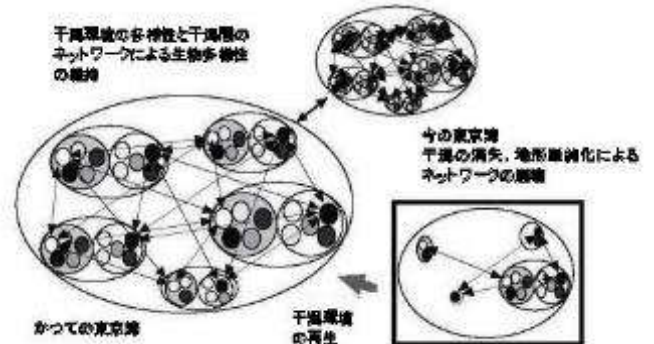


図-4 干潟生物群集多様性維持機構としての干潟ネットワーク

図-4に干潟生物地域群集維持におけるプランクトン幼生分散をととしたネットワークの概念を示す。東京湾内の干潟生物群集はネットワークに支えられたひとつの生活空間単位（地域）と考えられる。かつての東京湾海岸のほとんどが干潟であり、各河川の河口部には河口湿地があり、各地の干潟内での地形的多様性も維持されていた。このなかで干潟生物各種は各所にある干潟内での多様な環境のなかでそれぞれの生活域をもち、それぞれの種は湾内各地の干潟と幼生分散を通じたネットワークを形成していた。

このような強固なネットワーク機構により各種個体群と群集を維持していた。しかしながら、開発によりほとんどの干潟が消失し、そのなかで河口湿地など干潟内の特定な環境がより著しく消失することで干潟環境の多様性が減少すると、消失した環境への依存度の高い種ほどネットワークの崩壊が著しくなり、結果として地域全体（東京湾）で個体群の衰退が進行した。このような干潟生物の個体群さらには地域全体の群集維持機構を考えると、干潟環境の再生はネットワーク機構の復元つまり各所での干潟の再生を視野に入れ、局所的に消失した干潟全体の環境そのものの復活と同時に、残存する干潟内での環境多様性の回復も目指さなければならない。

新浜の話93 ～たぬきちとおしん～

2000年10月31日、首輪と鎖がついたタヌキが江戸川対岸の高谷川岸で保護されて来所しました。蓮尾嘉彪が鳥獣保護員をやっていた関係で、野鳥病院でも獣類が持ち込まれることがありました。

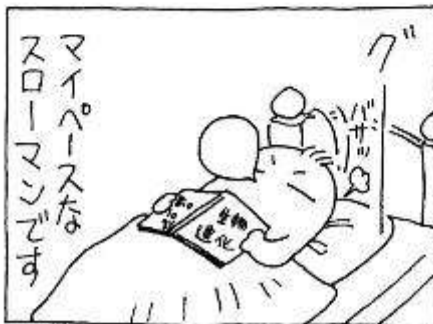
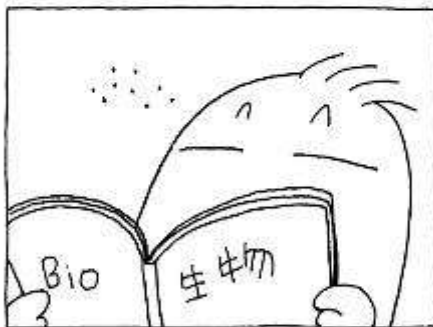
たぬきちと呼ぶ人と、ぽんたと呼ぶ人と。私はたぬきち派。ヒトの女性には優しい女好きでしたが、男性にはおおよそ受けが悪く、顔を見るだけで唸ったり、長靴の

千葉県野鳥の会 市川市 蓮尾 純子

上からでも血が出るほどひどく噛みつくことも。私とはだんだんに信頼関係ができて、抱っこもできましたが、口元に自分の喉をさらすまでにはけっこう勇気が必要でした。お客様の中には初対面からひざにさせて撫でまわした方がおられます。「たぬき姫」とお呼びしましたが、ほんとうにたぬきちと相性のよい方でした。

スローマン⁵⁷

作：つば
おしん



難解な生物学・生態学を一般化
するのが私の役目だと認識して
きました。(作者談)

たぬきちは「かわいいね」とほめられたり、優しくなでられたりするの
が大好き。必ず私が口元をガードした上で、見学に来られる小学生のみな
さんになでてもらったものです。一クラス、30人か40人もの子供さんに
囲まれると、正直なところ人間の私たちでも緊張します。でもたぬきちは
平気。「わあ、ふかふか」「うちのえりまきと同じだわ」毎年15校以上、1
学年100名近くになでられて10年くらい、たぶん、世界でいちばん多く
の人間になでられたタヌキとしてギネスものと思います。1クラスの対応
が終わると私たちはほっとするのですが、たぬきちは「お次はまだ？」と
人待ち顔。保育園の子供さんたちに囲まれた時などは、とろとろに溶けそ
うに満足した様子でした。

野鳥病院の廊下に置いたケージが夜の寝場所。朝、つなぎひもをつけて
外のつなぎ場に出すのが私の役目。ある時、移動の最中に大きな蛇が禽舎
のすき間に這いこもうとしているのを見つけました。あわてて蛇をつかん
だものの、たぬきちが気づいたら蛇を食い殺してしまいます。右手にタヌ
キ、左手に蛇、にっちもさっちも行かず、道を通る人に助けを求めてスタ
ッフを呼んでももらいました。

2012年4月8日、老衰で死亡しました。

下半身不随のハクビシン、おしんは2004年5月28日に江戸川対岸の
二俣から来所。交通事故に遭ったのでしょうか。後足はまったく動かないの
ですが、何度もケージから脱走して物置にひそみました。前足だけではり
にぶら下がり、けっこう上手に移動します。幼獣から飼われたたぬきちと
違い、ほんものの野生動物。手など出そうものなら、思いきり噛みつかれ
ました。爪もあっさり突き通すほどの鋭い歯です。果物が好きで、ミカン
をひとふさ差し出すと、歯を見せないようにそーっとくわえとりました。
ブドウをやると、デラウェアのような小さい粒でもきちんと皮を出します。
種は気にせず吞んでいましたね。甘いものが大好きで、北海道チーズ蒸し
ケーキはさいごまで喜びました。

後足が使えないので、首などをかいてもらうのは大好き。かいて欲しい
時は下を向いて、前足でくるっと口元を隠します。棒や歯ブラシなどで首
や背中をかいてやるとうっとりした目つきをします。それでもきれいな白
い鼻づらを鼻先、口元まで触れるのはこわくてできませんでした。

ハクビシンのしっぽは太くて長く、つけ根などひとつかみはあります。
面白いことにはしっぽをつかむと、振り向いて噛みつこうとはせず、ひた
すら前へ逃げようとします。移動させる時は、まずしっぽをつかみ、頭か
ら洗濯ネットをかぶせます。動物病院に連れて行く時は、ネットの上から
バスタオルでくるみこみます。ケージの外にしっぽを引き出して洗ってや
ることもありました。

幼獣のこしんちゃんと一緒にいた数カ月が、おしんにはいちばん幸せな
時期だったかもしれません。2頭が遊ぶ時の楽しそうな様子は忘れられま
せん。2025年3月11日死亡。野生動物の誇りを最後まで見せた生涯でし
た。

【発送お手伝いのお願い】ニュースレター2025年12月号(第340号)の発送を12月8日(月)10
時から千葉市民活動支援センター(千葉市中央区中央2-5-1 千葉中央ツインビル2号館9階)にて
おこなう予定です。お手伝いいただける方は小西 090-7941-7655)までご連絡ください。

..... あなたも入会しませんか

住所〒

ふりがな
氏名

Tel

E-mail

会費の郵便振替口座は 00130-3-369499 です。

NPO法人ちば環境情報センターのニュースレターとイベント情報は、リサイクルペーパーを使用しています。

編集後記：今年も来年のカレンダー「下大和田谷津田ごよみ
2026」を作成しました。今月のニュースレターに同封したので、
ぜひご利用ください。毎月掲載されている写真は全て、その月に
下大和田の谷津田・里山で、ちば環境情報センターの会員が撮影
したものです。開発問題で揺れ動く下大和田ですが、このかけが
えのない環境を次世代に残していきたいと願って活動していきま
すので、ご協力よろしくお願いします。 mud-skipper

あすみ小学校 10月20日(月) 報告:赤シャツ親父 長かった残暑が急速に引き、やや肌寒い曇り空でした。早朝に唐箕、足ふみ脱穀機、千歯こき等、未だ現役の古い機械を運び込みいそいそと準備する中、子どもたちが怒涛の様に訪れました。大勢の保護者ボランティアさんのご活躍もいただき、子どもたちは伸び伸びと楽しそうに作業に勤しみました。収穫量自体は例年並みでしたが、ふっくらと実りは大変良かった様に思いました。

大椎小学校 10月31日(金) 報告：たんぼぼ 雨が予想されていましたが、やや肌寒さの中、一時日も差す心地よい陽気でした。やはり、収穫の喜びはひとしおで、大勢の保護者ボランティアが笑顔で見守る中、作業に勤しむ子どもたちからは、一層明るい歓声が溢りました。今回は最後にフリータイムを設け、気に入った作業に再挑戦。縄緬いからは、前代未聞のとても太くてとても長い縄が出来上がり先生もびっくり。それを前に皆で記念撮影を行いました。

☆睡蓮田んぼ「古代米の脱穀」10月 5日(日) 報告：赤シャツ親父 午前中から夏日となり、未だセミの声も響く中、睡蓮田んぼの黒米の脱穀を行いました。古代米達の実りも良好な様子で、ふっくらとした黒米の粳がパチパチと飛びました。脱穀作業は迅速に進み1時間程で終了。その後、イノシシに荒らされた小学校田んぼの畦の整備をしっかりと行うことが出来ました。

参加者5名(大人5名)

☆あすみ小学校ゲストティーチャー 10月30(木) 報告：たんぼぼ 小学校の先生たちにより企画された「小学校田んぼについてより深く理解するための授業」が実施されました。ゲストティーチャーとして、田んぼスタッフ(3名)と、小山にて永く農業を行ってこられた地元の方が招かれました。子どもたちからの質問に答える形で進行し、学校田んぼの歴史、小山で出会う生物とそれらの棲む環境についてそして小山町の農業について紹介しました。

【谷津田・季節のたより】 2025年10月

＜下大和田町＞ 報告 平：平沼勝男 高：高山邦明

10/5 元の田んぼと周辺ではオオバコ、ヌメリグサ、カントウヨメナが、森ではヒメジソ、ヒヨドリバナ、シラヤマギク、オオアレチノギクが咲く。(平) 10/13 元の田んぼでミゾソバが美しく、そこにウラナミシジミが蜜を吸いに来ていた。普段は森の中や林縁で見かけるオオアオイトトンボも、他にキチョウとヤマトシジミを水辺で見かける。ウグイスの地鳴き、ヒクイナの声を聴く。(平) 10/19 クヌギの老木にたくさんのウスヒラタケが。来る途中ソバの畑が満開でとてもきれい。(平) 10/30 林でフユイチゴが実をつける。休耕田となった田んぼにアキアカネ、ノシメトンボ、マユタテアカネ、コノシメトンボ。アシ原にアオジ(高)

＜小山町＞ 報告 た：たんぼぼ、松：松下恵美子、碓：碓夕子、波：波多野めぐみ、高：高山邦明

10/2 冬鳥のクサシギの姿を今季初めて見る(高) 10/5 ツクツクボウシの声(た) 10/6 ミゾソバの花咲く(た) ヒメクロホウジャクがキバナアキギリの花の蜜を吸う、林縁でヤクシソウが開花(高) 10/7, 28 ニホンリス、道を横切る(た) 10/8 シシウドやツリガネニンジンが咲く(高) 10/9 谷津の上空をノスリが飛ぶ(松) 10/12 台地の上の畑をニホンリスが駆ける、林縁でサラシナショウマが咲く(高) 10/24 刈ったイネをよく見ると株元に多数の小さなアオバアリガタハネカクシが付いていた、田んぼに来たオオアオイトトンボが小さな虫を捕まえる(碓)、気温が低いせいかカマキリの動きがにぶい(波)、谷津の奥からアオバトの声がした(高) 10/27 肌寒さのある日、ヤマカガシを短い間に二匹観る(た) 10/28 セグロセキレイが3羽で行動、親離れしない若鳥がまだ一緒にいるのか？林縁の日だまりに多数のオオアオイトトンボが集まっていた(高) 10/30 今季初めて田んぼでジョウビタキの声を聞く(高) 10/31 林でトラツグミの姿を見る(高)

【イベントのお知らせ】主 催：NPO法人 ちば環境情報センター

＜下大和田谷津田＞ 連絡先：小西 TEL. 090-7941-7655, E-mail: yatsudasukisuki@gmail.com

・第312回下大和田 YPP「古代米の脱穀」

日 時：2025年11月 9日(土) 9時45分～12時 雨天中止

内 容：10月25日に稲刈りした緑米と赤米の脱穀をします。久々のYPPです。

持ち物：長靴、長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物など 参加費：無料

・森と水辺の手入れ

日 時：2025年11月16日(日) 9時45分～12時 雨天中止

内 容：マイ田んぼ復活のための整備を行います。

持ち物：長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物、午後まで活動する方は弁当、敷物 参加費：無料

・森の手入れ

日 時：2025年11月23日(日) 9時45分～12時 雨天中止

内 容：森の木の伐採や畑の整備を行います。

持ち物：長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物、午後まで活動する方は弁当、敷物 参加費：無料

・第311回 観察会とゴミ拾い

日 時：2025年12月 7日(日) 9時45分～12時 雨天決行

内 容：木々の黄葉を楽しみながら冬越しにやってきた鳥たちを求めて谷津と森をめぐります。

持ち物：筆記用具、飲み物、長靴、帽子、ゴミ袋、敷物 参加費：100円

＜小山町谷津田＞

睡蓮田んぼ「古代米の脱穀作業」

日 時：2025年11月15日(土) 10時00分～ ☆小雨決行 場 所：りんどう広場

※ 学校田んぼと睡蓮田んぼに関しては赤シャツ親父(tomizo_i@nifty.com)、その他のお問い合わせは高山(ceic.ypp.oyama@gmail.com)までお気軽にメールでご連絡下さい。

